川路寛堂

本名 川路太郎

かわじ・かんどう　かわじ・たろう

誠之館教師

経　歴		
生：弘化元年（1844年）12月21日、江戸麹町区富士見町生まれ		
没：昭和2年（1927年）2月5日、享年84歳、多摩墓地に葬る		
弘化5年（1848年）	3歳	父が病没し、叔父の井上清直に育てられる
嘉永5年（1852年）	8歳	川路家に戻り、祖父の庇護を受ける
―	―	日下部伊三次・安積艮斎に儒学を学ぶ
―	―	昌平黌（昌平坂学問所）に学ぶ
―	―	箕作阮甫に語学を学ぶ
―	―	蕃書調所で蘭語を学ぶ
―	―	中浜万次郎・森山多吉郎に英学を学ぶ
―	―	横浜語学伝習所において、メルメ・ド・カションに仏学を学ぶ
―	―	酒井良祐に剣術指南を受ける
安政4年（1857年）	13歳	元服し将軍家茂の小姓組番士となる
安政6年（1859年）8月	14歳	祖父が免職のため、家督を継ぐ
―	―	蕃書調所に勤める
文久3年（1863年）正月	18歳	小納戸となる
文久3年（1863年）9月	18歳	旗本浅野長祚の子浅野花子と結婚
文久3年（1863年）末	18歳	将軍上洛に従い、京都で佐久間象山にも会う
元治元年（1864年）6月	19歳	勤仕並寄合となる
慶応2年（1866年）8月	21歳	幕府陸軍の歩兵頭並（大隊長格）となる
慶応2年（1866年）10月25日	21歳	幕命により英国に留学のため横浜を発つ
慶応2年（1866年）末	21歳	ロンドンに到着
慶応3年（1867年）正月～ 慶応4年（1868年）6月25日	22～ 23歳	文学士モルトベイ氏の個人教授で海軍術・英文学などを学ぶ
明治元年（1868年）	23歳	維新に際し藩地静岡に赴かず、本籍を東京府平民とする

明治元年(1868年)	23歳	横浜で貿易商を営む
明治4年(1871年)10月22日	26歳	岩倉具視特命全権大使随員として、外務七等出仕三等書記官に任命される
明治4年(1871年)10月29日	26歳	外務省七等出仕
明治5年(1872年)6月25日	27歳	財政出納事務取調としてニューヨーク滞在
明治5年(1872年)8月19日	27歳	大蔵省七等出仕
明治6年(1873年)1月10日	28歳	土木工役視察としてオランダに滞在
明治6年(1873年)2月～ 明治6年(1873年)9月	28歳	特命全権大使一行の一員として、ドイツ・ペテルスブルクや、イタリア、オーストリア、スイスの各地から中国経由で帰国
明治6年(1873年)9月	28歳	続いて大蔵省で残務整理
明治7年(1874年)3月28日	29歳	横浜出張
明治7年(1874年)8月15日	29歳	大蔵省検査寮改正取調掛
明治8年(1875年)1月18日～ 明治8年(1875年)3月	30歳	暹羅(シャム)国(現タイ)に差遣される
明治8年(1875年)9月23日	30歳	大蔵省において翻訳事業
明治9年(1876年)1月13日	31歳	大蔵権少丞
明治9年(1876年)2月20日	31歳	敘正七位
明治10年(1877年)1月11日	32歳	官制改革により免職される
―	―	実業につくが失敗
明治18年(1885年)～ 明治26年(1893年)夏	40～ 48歳	芝三田台三番地に英語塾「月山学舎」を開く
明治21年(1888年)	42歳	長子柳虹が生れる
明治25年(1892年)6月15日	47歳	雑誌『平和(第3号)』に「平和と戦争」を寄稿
明治25年(1892年)8月28日	47歳	雑誌『平和(第5号)』に「平和と戦争(続き)」と「平和会の設立を喜び併て平和大団の結成を希望す」を寄稿
明治25年(1892年)10月31日	47歳	雑誌『平和(第7号)』に「仲裁法(Arbitration)」を寄稿
明治26年(1893年)1月26日	48歳	雑誌『平和(第10号)』に「廃戦論」を寄稿
明治26年(1893年)3月26日	48歳	雑誌『平和(第11号)』に「平和の基は勇気なり」を寄稿
明治26年(1893年)8月	48歳	尋常中学福山誠之館雇教員
明治26年(1893年)9月～ 明治32年(1899年)7月6日	48～ 54歳	尋常中学福山誠之館雇教師
明治31年(1898年)	53歳	本籍を広島県深安郡深津村に移す
明治32年(1899年)7月6日	54歳	兵庫県洲本中学校教諭心得
明治36年(1903年)1月31日～ 大正3年(1914年)4月	58～ 69歳	兵庫県津名郡三原郡組合立淡路高等女学校初代校長

大正3年(1914年)4月～ 大正11年(1922年)	69～ 77歳	神戸の松蔭高等女学校(現松蔭女子学院)副校長
大正11年(1922年)	77歳	神戸市葺合町ノ内熊内池ノ端に住む

生い立ちと学業、業績

弘化2年(1845年)12月21日、江戸は麹町区富士見町で生まれ、本名は太郎、諱は温、号は寛堂。父は川路彰常(かわじ・あきつね)。祖父・川路聖謨(かわじ・としあきら)は、幕末の勘定奉行・外国奉行として、多くの難問題を処理し、阿部正弘にも深い信頼を得ていた。

3歳の時、父川路彰常が没し、以後祖父聖謨の庇護の下に成長した。しかもその祖父も将軍継嗣問題から安政の大獄の累を蒙り、安政6年(1859年)8月免職・隠居・慎を命ぜられたため、安政6年(1859年)8月、14歳の若さで家督を継いだ。その間、箕作阮甫・中浜万次郎らに学び、さらに蕃書調所に勤め、勉学に励んだ。

文久3年(1863年)正月小納戸となり、同年末の将軍上洛に従い、京都で佐久間象山にも会った。元治元年(1864年)6月小納戸を罷めて勤仕並寄合となったが、慶応2年(1866年)栗本貞太郎らとともに横浜仏語伝習所の第一期生となり、カションについて勉学に励んだ。慶応2年(1866年)8月「歩兵頭並」となる。

慶応2年(1866年)の秋、幕府は幕臣80名の中から14名を選んで、英国に留学させることにした。この時23歳の川路太郎は、儒者中村敬宇とともに取り締まりを命ぜられ、10月横浜を出帆し、同慶応2年末ロンドンに到着した。一般の留学生はユニバシティ・カレッジスクール中学に入学したが、彼のみは特別に英国ロンドンで、文学士モルトベイ氏の個人教授を受け、慶応3年(1867年)正月から、明治元年6月まで、海軍術・英文学などを学んだ。

慶応4年(1868年)3月15日、幕府瓦解に際して祖父聖謨は江戸開城の風説を信じてピストル自殺し故家は倒産の状態にあった。慶応4年(1868年)6月25日、寛堂は横浜に着き、わが家に到着した時には聖謨はこの世の人ではなかった。その後、横浜に出て貿易商を営んだが、明治4年(1872年)大蔵省に出仕、明治5年(1873年)岩倉具視特命全権大使随員として、外務七等出仕三等書記官に任命され、通訳その他のことに当った。随行総員は48名であるが、氏は1年10カ月に及ぶ出張中、特に米国の財政事情、オランダの土木工事を調査するよう命ぜられている。帰国後は、外務省で外国文書課長であったり、大蔵省などに勤務していた。一時は大蔵卿大隈重信の愛顧を受け、明治8年(1875年)その命によりタイ国を視察した。明治10年(1877年)1月、各省の官制改革により、その職を免ぜられた。再び実業ついたが失敗した。

以後、しばらくの間の経歴は明らかでない。

明治18年(1885年)42歳のとき、芝三田台三番地に英語塾「月山学舎」を開いた。寛堂が福

沢諭吉と旧知であったことから、慶応義塾に入学希望の学生の英語準備のための塾であったらしい。この塾は明治26年（1893年）に本校に着任する直前まで、およそ9年間続けられた。

この頃、長子川路柳虹が生れた。

明治26年（1893年）8月、本校に雇教員として着任《明治26年（1893年）9月10日任教師》、明治32年（1899年）7月までの6年間・英語教師の職にあった。

明治32年（1899年）7月6日に本校を退任、兵庫県洲本中学校教諭心得に任ぜられ、3年6カ月在勤の後、明治36年（1903年）1月31日、兵庫県津名郡三原郡組合立淡路高等女学校初代校長にむかえられた。この学校における川路校長の教育方針はきわめて進歩的であり、その一例として、多くの反対をおし切って明治38年に始められた全校海水浴の実施などがある。これは以後同校の名物行事となり、氏は「開明校長」として有名となった。大正2年（1913年）2月4日、淡路高女の基礎を確立した後、神戸の松蔭高等女学校（現松蔭女子学院）の副校長に転じた。大正11年（1922年）神戸松蔭女学校を退任、以後神戸に隠棲した。昭和2年（1927年）逝去。

川路家は代々が幕府に使え、寛堂も500石の幕臣であったにもかかわらず、本校に残る川路寛堂自筆の履歴書には、「東京府平民」（兵庫県立洲本高校所蔵のものには「広島県平民」）と記載されている。本人の記述によると、「身上異動」として「元来旧幕府ノ臣ナリシガ明治元年維新ノ際地タル静岡ニ赴カズ民間ニ下テ平民トナリ本籍ヲ東京府ニ定メタリ爾後明治三一年都合アリテ現今在籍地広島県ニ籍ヲ移シタリ」とあり、その理由を明らかにしている。そのあたりにも、寛堂が高名な幕臣の家に生まれ、幕末維新の混乱の中を、己の才覚のみを頼りに生き抜いた、その生き様や自負の気概の片鱗を伺うことができる。

氏の著作『川路聖護之生涯』（明治36年10月5日発行、700頁）は、明治元年（1868年）徳川幕府に殉じた祖父川路聖護の伝記である。福山尋常中学在任中の明治30年（1897年）4月に稿を起し、兵庫県洲本中学校に在任中の明治34年（1901年）2月までの4年をかけた大作であった。

長子・川路柳虹

長子・川路柳虹（本名：誠、明治21年[1888年]～昭和34年[1959年]）は、明治・大正・昭和を生き、後年には詩人・美術評論家として一家をなした。柳虹の著書に『黒船記』、『川路寛堂略伝』などがある。

誠之館所蔵品				
管理№	氏　名	名　　称	制作／発行	日付
07022	川路寛堂　書	「徳川斉昭公親書及びその由緒書」	―	明治27年
02092	川路寛堂　著	『川路聖謨之生涯(一)』(コピー)	川路寛堂	明治35年
02093	川路寛堂　著	『川路聖謨之生涯(二)』(コピー)	川路寛堂	明治35年
02094	川路寛堂　著	『川路聖謨之生涯(三)』(コピー)	川路寛堂	明治35年
02095	川路寛堂　著	『川路聖謨之生涯(四)』(コピー)	川路寛堂	明治35年
04852	坂口満宏　著	「〈研究ノート〉雑誌『平和』をめぐる人々ー「日本平和会」の新史料とともにー」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』抜刷	京都女子大学大学院	平成18年
06538	高梨健吉　著	『文明開化の英語』	藤森書店	平成20年

坂口満宏氏より、資料提供と多くのご教示を頂きました。(2008年2月)

出典1:『誠之館百三十年史(上巻)』、504頁、福山誠之館同窓会編刊、昭和63年12月1日

出典2:『明治維新人名辞典』、305頁、日本歴史学会編、吉川弘文館刊、昭和56年9月10日

出典3:『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要』、抜刷「〈研究ノート〉雑誌『平和』をめぐる人々ー「日本平和会」の新史料とともにー」、坂口満宏著、京都女子大学大学院文学研究科編刊、2006年3月31日

出典4:『社会労働研究(37巻3号)』、「元幕臣の英語教師川路寛堂のこと」、宮永孝、法政大学社会部学会編刊、1990年2月

出典5:『文明開化の英語』、79頁、高梨健吉著、藤森書店刊、1978年11月20日

関連情報1:HP「早稲田大学」、図書館・博物館(総合学術情報センター)、WULDspace(早稲田大学リポジトリ)

2005年4月8日更新:経歴、出典●2006年6月23日更新:タイトル・所蔵品●2007年1月17日更新:経歴・本文・著書・出典●2008年2月1日更新:本文●2008年3月3日更新:経歴・本文・誠之館所蔵品●2008年3月13日更新:経歴・出典・関連情報●2009年8月14日更新:誠之館所蔵品●2010年10月19日更新:氏名・経歴・探しています・出典●2014年7月17日更新:誠之館所蔵品●2015年3月9日更新:誠之館所蔵品●